

恐怖のなぞが解けるとき 3分後にゾッとするラスト

「百物語」をやってみた【後日編】	石段の上	水たまり	城跡	この子は誰
109	101	93	85	77

あとがき	付録「鏡」	高架下	三列目の座席	夜行バス
143	137	129	121	113

わたしが見えるの？

「百物語」をやってみた【準備編】	ついでる	お化け屋敷	合わせ鏡	私が見えるの？
37	29	21	13	5

「百物語」をやってみた【実行編】	眷属	四月の雪	五階の窓	三輪車
73	65	57	49	41

そのハガキが届いたのは、

夏祭りも近い暑い日だった。

中学を卒業して以来、クラスの仲間たちと会う機会は、ほとんどなかった。

「夏祭り恒例の花火大会に、久しぶりに集まろう。集合場所は中学校の校門」

校門から花火大会の会場まで、

「あの頃のように、みんなでいっしょに歩いて行こう」

ハガキの文面はこう続いていた。

集合時間は、暑さを避けて、日が傾きはじめる夕方だった。

花火大会の当日、ぼくが校門に着くと、もうみんなは集まっていた。

少し会わないうちに、

みんな、ちょっと大人っぽくなったように見える。

「相変わらず、遅刻癖はなくなるいな」

友人の言葉に、みんなが笑った。

「集合時間には遅れてないだろう」

ぼくも笑いながら答える。

友人との会話の間、ふと視線をずらすと、

校門脇のイチヨウの木の下に、

懐かしい姿が見えた。

あまり話す機会はなかったが、あの頃ちょっと気になっていた彼女が、佇んでいた。

夕方の薄暗い木陰にいるせいか、

はっきり見えないが、間違いなく彼女だ。

なんとなくもの言いたげに見える。

ふいに、肩を叩かれ、くだらない冗談に引きずり込まれた。そして、

「おまえ、いつまでここにいられるの？」

「夏休みが終わるところまでは、たぶん・・・」

ぼくは、地元を離れて、全寮制の学校に通っている。友人の話が途切れるのを待って振り向いたが、もう彼女の姿はなかった。

きっと女の子たちに交じって、話をしているのだろう。

「あとで話しかけてみようかな」

薄紫色の空が暗くなりはじめた。

花火大会の開催を告げる号砲花火の音が響く。

ぼくたちはみんなで、会場に向かった。

会場に着くと、まもなく花火が夜空を飾りはじめた。花火の合間を縫って、友人の輪の中に彼女を探す。少し離れた場所で空を見上げる彼女の顔が、花火が打ちあがるたびに見えた。

花火大会が終わると、記念に集合写真を撮ることになった。

夜でも街灯が明るい、学校近くの公園に行くことにした。

集合写真では、ぼくは昔からいつも右端が定位置。今日もその定位置に立つ。

すると、いつの間にかぼくの右隣に彼女が立っていた。

少し恥ずかしい気もしたが、なんとなくうれしい。

「解散したら話しかけよう」

そう思っていたが、みんなと別れの挨拶をしているうちに、彼女を見失ってしまった。

結局、その日は近所の友人といっしょに帰宅した。

その花火大会から数日後のことだ。

昼から図書館に出かけた。

調べものが終わり、外に出るとあたりはもう薄暗く、街灯がつく時間になっていた。

自転車に乗って、帰宅を急ぐ。

しばらく走ると、歩道橋下に佇む人影に目が留まる。